

第5節 授業のシステムとルールを創る

1 授業構想と授業のシステム

毎年4月を迎えると、その年度の授業をどのように展開するかをあれこれと検討することになる。どのような授業を創造するかということを様々な角度から検討し、具体的な授業のイメージを構築するという「授業構想」は、現場の教師にとってきわめて重要な課題の一つである。特に新年度の授業に望む際には、個々の授業時間における構想や単元の構想に加えて、大きく年間の授業の全体的な構想もしっかりと立案する必要がある。構想を体系的に整理して年間指導計画が充実したものになれば、その年度の授業の基盤が構築される。場当たりの授業ではない、体系的・系統的な授業を展開するのが理想である。

大学においても授業の重要性に配慮して、シラバスの充実が強く求められるようになった。担当者は高等教育を担う立場として、しっかりとした年間指導計画を立案して、学生にとって魅力ある授業を展開しなければならない。そのための一つの方向として、詳細なシラバスが要求されている。

そこで本節では、個々の授業をより効果的なものにするために、授業のシステムおよびルール創りという課題について考えてみたい。なお中学・高校の場合は、同一学年を複数の教師が担当することがある。特に学級数の多い学校では、当然のことながら担当者の数も多くなる。そのような場合には、担当者相互の間で十分な協議を重ねて基本的な方針を確認しなければならない。少なくとも、指導目標や使用する教材については学年を通して統一する必要がある。定期試験の問題も共通の内容として、担当者による評価の基準に齟齬がないようにする。ただし今回話題にする授業のシステムやルールの構築という点に関しては、個々の教師の個性が反映されることも許される。自身のオリジナルな授業構想のために、様々な工夫を生かしたいと思う。

授業構想の基本は、常に学習者の側に立つということである。言うまでもなく授業の主役は学習者であり、教師はコーディネーターとして彼らの学びを支援する立場にある。まずは学習者にとってどのような授業がふさわしいのかということ、構想の基盤に据えなければならない。いくら教師の側で十分な教材研究をしても、その成果が彼ら学びに生かされなければ授業は成立しない。

本研究で繰り返して話題にする「研究の手引き」「研究資料」と「授業レポート」の作成という作業を通して、授業を構想することができる。これらは毎授業時間ごとに作成し、印刷をして学習者に配布するものだが、どのような授業を展開するのかという点を反映させた「研究の手引き」の作成が、そのまま授業構想に直結する。さらに「授業レポート」のフォーマットを作成して、授業のどの場面でどのような学習者の活動を保証するのかを検討する。毎回の授業の構想を「研究の手引き」および「授業レポート」という形に表すことによって、常に検証することができる。それは重要な授業のシステムとしてとらえることができる。本節ではまず「研究の手引き」「研究資料」および「授業レポート」に関して、具体的に言及したい。

2 「学習の手引き」と「学習記録」からの出発

わたくしが授業に際して学習者全員に配布資料を用意するようになったのは、大村はまの実践に学ぶところからである。大村は一人ひとりの学習者にその授業で何をやるのか、分かりやすく提示する「学習のてびき」を作成した。それは文字通り、学習者の「手を引いて」学びの世界へといざなう¹ものである。彼らは「学習の手引き」²によって、当該授業における具体的な活動を理解することができる。そして大村は、「学習記録」³を付けるようにきめ細かく指導し、個々の学習者は自らの学びを整理して記録することになった。このような方法は優れた授業のシステムとして効果的に機能する。これに学んで、わたくしは毎回の授業に際して配布資料を準備することになった。その名称も大村の実践に倣って、「学習の手引き」および「学習記録」とした。

まず「学習の手引き」には、その授業時間の授業内容を整理しておく。具体的には、次のような形式のものになる。

- ① 通し番号・単元名・学習のテーマ
- ② 目標（その授業で目標とする点）
- ③ 教材（授業中に使用する教材）
- ④ 展開（主な学習活動）
- ⑤ 評価（学習活動のまとめ。②の「目標」に対応する）
- ⑥ 次回の予定（次回までの学習課題の指示。次回の授業内容の予告）

①から⑥の項目について、分かりやすくまとめて印刷し、毎時間授業の前に学習者全員に配布する。グループ学習の際には、グループごとに「学習の手引き」を作成し、個々のグループの学習内容を提示するようにした。

続いて「学習記録」の方は、「学習の手引き」の「展開」の内容に即した欄が中心になる。学習者が授業中に記録できるように、ワークシートとしてのフォーマットを工夫する。特に個人の見解とクラスで出された仲間の見解とは、明確に区別して記入させる。記入する欄が不足した場合は各自ノートで補充する。なお、補充に便利のように、ノートはルーズリーフ形式のものを使用させる。

「学習記録」の末尾に「評価」の欄を設けて、授業終了時に「A、B^o、B、B[´]、C」を用いた5段階評価を記入させる。「A」は評価項目に関して十分に達成できたとき、「C」は反対に達成できなかったときに記入する。そして最後に「本日のひとことメモ」の欄を設けて、授業の感想や質問事項、もしくは学習者の近況報告などを自由に記入できるようにしておく。「学習記録」は毎時間提出させ、原則として次の授業時に返却する。

「学習の手引き」と「学習記録」とは当初は1枚の用紙に印刷し、二つ折りにして提出させた。教師が検閲するのは「学習記録」の欄で、必ず目を通して検閲の印を押す。誤字・脱字があれば、気の付く限り訂正する。工夫された表現には「○」印、問題のある表現には「？」印をそれぞれ記入する。そして「ひとことメモ」の欄に何か書いてあれば、コメントを添えるようにしている。教務手帳に個々の学習者の記録を残して、可能な限り次の授業までに返却する。返却された資料は二つ折りにしたまま、穴をあけてファイルに綴じておくように指示を出した。

「学習記録」には、その授業における学習活動が学習者自身の手によって記録され、整

理される。授業中に教師の発する「問い」に対して、自分自身で考え、自らの「答え」を記録する。他人のノートをコピーするのではなく、自分自身のノート（記録）を作成することで、彼らは直接授業に参加しているという実感を抱きつつ記録を取ることができる。さらに、考えを書くことによって整理し、また書くことによって考えを発展させることもできる。そこに「学習記録」による実践の意義を見出すことができよう。

「学習記録」のプリントは毎時間回収して教師が点検することになるが、その内容を見ると、個々の学習者の状態が端的に表れている。「評価」の欄からは、その授業の学習活動に対する理解の状態を知ることができる。また「ひとことメモ」の欄を通して、彼らとのささやかな心の交流ができる。「学習の手引き」の作成や「学習記録」の点検は、教師にとって負担になるのは事実である。しかしながら、教師の負担相応の効果をあげることができることから、毎時間続けるように心がけることにした。

「学習記録」のフォーマットは、ある時期からB5判の横書き形式にフォーマットを変更した。「学習の手引き」とセットにしてB4サイズで印刷する方式は当初の方式を踏襲した。「学習記録」を左側に、「学習記録」を右側に印刷する。授業終了時に中央から二つ折りにして提出させ、そのままファイル・ストックさせることになる。「国語科」というと当然「縦書き」という固定観念があるわけだが、公文書の書式等を勘案しても時代はむしろ「横書き」の趨勢にあることから、積極的に横書きの形式を取り入れることにした。

3 「研究の手引き」「研究資料」「授業レポート」へ

「学習の手引き」は、さらに自ら主体的に研究課題に向き合う姿勢を強調し、また大学の授業でも使用できるように「研究の手引き」という名称に改めた。その内容は前項の「学習の手引き」に準拠したものである。そして「学習記録」も、授業中にまとめるレポートという意味合いを込めて「授業レポート」という名称にした。さらに特別に用意する教材がある際には、「研究資料」と命名して作成した。

具体的な実践としては、個々の授業の目標や内容を「研究の手引き」と称するレジюмеに要約して、毎時間学習者に配布する。そのときに「授業レポート」をあわせて配布する。学習者は「研究の手引き」における目標や学習内容を確認しながら、自分で考えたこと、および授業中に話題になったことなどを「授業レポート」にまとめるように指導することになる。「授業レポート」は毎時間提出させ、教師が内容を点検してから返却をする。なお、実社会に出てからの公文書のフォーマットはA4サイズ・横書きということから、国語科の授業で使用する「研究の手引き」「授業レポート」また「研究資料」は、すべてA4サイズ・横書きの形式とした。

この「研究の手引き」と「授業レポート」を作成し印刷することは、教師側の教材研究であり、また授業構想の具体化でもある。そして「授業レポート」は、学習者にとって「ノート」として自由に伸び伸びと書くことができるように配慮する。「研究の手引き」に従って授業が展開され、その授業展開に応じて「授業レポート」をまとめる。「授業レポート」には、「個人レベル」および「クラスレベル」の欄をそれぞれ設けることにする。「個人レベル」の欄には、授業において提起された様々な課題について、自分自身で感じたことや考えたことをまとめる。これに対して「クラスレベル」の欄では、クラスの他の人が発言

した内容や、教師が説明したことなどをメモすることになる。すなわち、「個人レベル」の欄においては、考えたことをまとめつつさらに認識を深めるために使用し、「クラスレベル」の欄は、授業中の様々な発言の内容を把握して要点をまとめるために使用する。書くことの機能を生かしつつ、毎日の授業において有効に用いることができるように工夫したい。

この「授業レポート」には、授業内容からは少し離れたことでも自由に書くことができる欄として、「本日のひとことメモ」を必要に応じて設けておく。授業中に学習者の意識は多様に広がり、授業内容から離れたことでも貴重な発見や問題意識を伴うことがある。それを「授業レポート」に書くことによって、さらに発想が豊かになり、認識が深まることを期待している。そして「本日のひとことメモ」の欄では授業中に感じたことを自由に書くことにするが、それはまた教師との対話の場所にもなる。「授業レポート」はすべての学習者に提出させることになるが、必ず教師が目を通してから返却する。その際に「本日のひとことメモ」のコーナーには、特に教師の側からも簡単なコメントを入れてから返却する。教師には多大な負担がかかることになるわけだが、このコメントによって学習者の中には「書くこと」への新たな意欲が喚起され、少しずつでも「書くこと」に意欲的な姿勢が芽生えてくる。

効果的な授業創りに向けて第一に考えるべきは、毎日の授業の中で学習者をいかに「書くこと」へと向かわせるかという点である。そのための一つの実践例として、「授業レポート」を用いた学習指導について紹介した。地道な学習を積み重ねることによって、書くことへの抵抗がなくなり、書く活動を通して考えるという習慣が身に付くようになる。国語科の個々の授業を通して、書くことの基礎的・基本的な指導を継続的に展開することはきわめて重要である。

授業中に配布した資料は、返却された「授業レポート」を含めてすべて整理してファイル・ストックするように指導する。このファイルには、前に紹介した「年間課題」の成果なども綴じ込んでおく。年間を通しての国語科の学習の記録がファイルされることになるが、それをそのままポートフォリオ評価として扱うことができる。

「研究の手引き」は、実際に授業で学習者に語りかけるようなスタイルで作成する。作成しながら、頭の中で授業のシミュレーションをする。そのときにはいつも授業を受ける学習者の立場になって、様々な問題を検証することになっている。このような素材に学習者は関心を示すだろうか、このような課題に興味を持って取り組むだろうか等々の問いを通して、彼らの側に立った構想を実現するように心がける。授業のシミュレーションにおいては、常に学習者の表情が見えるようにしたい。

授業構想は一年間を通したものの、単元および教材単位のもの、そして個々の授業時間ごとのものをそれぞれ検討し、相互の関連を図る。「研究の手引き」は単元や教材ごとに概要を作成したうえで、授業の展開に即して細部を調整したうえで完成させる。特に、前の授業における学習者の反応をそのまま次の授業に生かすことができれば効果的である。

授業のシステムを創る際に、わたくしはこの「研究の手引き」と「授業レポート」を活用している。毎時間ごとに配布して、「研究の手引き」に即した授業を展開しつつ、「授業レポート」に学習者の考えを自由に表現させる。「授業レポート」は終了後に提出させて、記録の内容を点検し評価をしてから返却する。プリント類はすべてファイルストックさせて、予習と復習の際に活用するようになっている。「授業レポート」を毎回提出させるとい

うシステムによって、学習者の授業に対する意識は高まり、主体的に学習に取り組む姿勢が整えられることが分かる。

2002年度の早稲田大学系属早稲田実業学校の授業の授業開きの際に用いた実際の「研究の手引き」と「授業レポート」の実例をもそれぞれP103からP105の《資料2-5-1》《資料2-5-2》《資料2-5-3》に紹介する。なおこの授業では、授業開きということもあって「研究の手引き」を2種類用意したものである。

4 授業のシステムとルールを創る

続けて具体的な授業のシステムとしては、次のような点に留意して、授業に対する学習者の理解が得られるように努力している。

- ① 教師からの講義形式による一方向的なメッセージ伝達型の授業ではなく、教師と学習者、さらに学習者同士でのインタラクティブなコミュニケーションの実現を目指す。
- ② 授業の中に、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関わる学習者の具体的な活動を設定する。
- ③ 学習の規模を、個人レベル、グループレベル、クラスレベルの三つの段階に分けて、それぞれのレベルにおいて効果的な学習が展開するように配慮する。
- ④ 定期試験の結果だけではなく、個々の学習者の日常の取り組みについて、可能な限り総合的に評価する。

その他、必要に応じて様々なシステムを構築して実際の授業に臨む。このようなシステム創りが、授業構想の段階において重要となる。そしてそれを授業開きの段階で、十分に徹底することができるように努力する必要がある。

授業のシステムとともに、授業における学習のルールを定めることもまた重要である。4月の授業開きの段階でルールに関する指導を徹底しておきたい。このルールとは、授業における秩序を明確にして、メリハリのある授業を展開するために必要不可欠なものとなる。特に新入生の段階で十分に指導を徹底することができれば、その後の授業にも有効である。

ルールは個々の教室の実情を勘案して定めることになるが、具体的な例としては次のようなものが考えられる。

- ① 授業時には、その授業で使用する学習用具（教科書、ノート、国語辞典など）を必ず持参する。
- ② 授業中に配布された資料は、すべてファイルに綴じてストックし、そのファイルを授業時に持参する。
- ③ 授業時に指示された学習課題にはしっかり取り組んで、必ず指定された期日までに提出する。
- ④ 指名された場合には返事をして立って答える。答えられない場合には、必ずその旨をはっきりと伝える。
- ⑤ 読んだり発表したりする際には、教室全体に聞こえるような大きさの声を出すように心がける。

重要なことは、無理な要求をせずすべての学習者が実施できるような内容のルールを考

えることである。そして、これらのルールはすべて評価に反映させるようにしたい。学習者の日常の努力を評価につなげることによって、彼らの学習意欲を喚起することができる。同時に、授業のルールに対する理解を得ることもできるだろう。

もちろん授業における学習のルールとは、学習者を管理するためのものではない。学習の方法に関する理解を深め、秩序ある授業展開を目指すためのものである。教師の側から一方的に定めるだけでなく、学習者との対話の中から生み出されるようなものも含めて考えるようにしたい。

以上のように、学習の展開の際のシステムおよびルールを構築することが、授業構想の要点である。新学期の授業開きの段階で、効果的な授業構想を目指したい。

《資料2-5-1・「研究の手引き」の実例・その1》

高1 国語I・現代文 研究の手引き No. 1-1: 2002年4月11日

高1A組()番【 】

◆本日の研究テーマ(1)＝本年度国語I・現代文の授業に関するガイダンス

1 担当者自己紹介: 町田 守弘(まちだ・もりひろ)

本年3月まで本校の教頭を務め、4月から早稲田大学教育学部・同大学大学院教育学研究科担当、本校は非常勤講師としての勤務となる。専攻は国語教育。大学では「国語科教育法」「国語表現論」、大学院では「国語科教育演習」(修士課程)、「国語科教育学研究指導」(博士課程)などの授業を担当している。主な著書に『授業を創る－【挑発】する国語教育』(三省堂)、『国語教育の戦略』(東洋館出版社)、編著に『新しい表現指導のストラテジー』(東京法令出版)、共著に『教師教育の課題と展望』(学文社)その他がある。

2 本年度授業の方向性＝他の高校にはない、本校の独自性を生かした内容と方法を試みる。

① 担当者の現職を有効利用して、早稲田大学および大学院との連携を強化した授業内容とする。

② 2時間連続という特性を生かして、大学での90分授業を意識した集中的な授業を展開する。

3 授業の目標＝新しい時代にふさわしい国語学力を育成する。

① 国語に対する興味・関心を喚起する。

② 自主的な問題発見、問題解決ができるようにする。

4 授業の基本方針

① 担当者からの一方向的なメッセージの伝達は避けて、担当者と受講者、受講者相互のインタラクティブなコミュニケーションを重視した授業を展開する。

② 定期試験のみではなく、受講者の学習活動を総合的に評価対象とする。

5 学習に対する受講者への依頼事項

① 原則として毎時間、授業で使用する資料を配布する。すべて氏名を記載してファイルにストックしてほしい。ファイルは各自購入すること。なお、穴を開けて保管する形態が好ましい。

② 「授業レポート」は授業中にしっかり記入して、終了時に提出する。返却されたら、ファイル・ストックをすること。

③ ノートはA4サイズ・横書きのルーズリーフを用意する。提出する場合は、必ず氏名を記載すること。新聞・雑誌記事などを貼り付ける場合もある。2枚以上になる場合は、左肩をホッチキスで綴じて提出する。

④ 授業時には原則として、教科書、ファイル、ノートを準備し、その他に必ず小型の国語辞典を用意すること。電子辞書でもよい。ロッカーに保管する場合、学習に必要な用具類はホームルーム終了後直ちに出して必ず机の上に用意しておく。

⑤ 課題・提出物等はしっかり取り組んで、必ず提出日に提出すること。欠席の場合、また事情があって授業時間終了時に提出不可能な場合は、講師室の提出ボックスに入れること。特別な事情なく期限を過ぎた場合には、いっさい評価の対象とはならない。

⑥ 授業は、大別して「個人レベル」「グループレベル」「クラスレベル」の各段階に分けて実施する。特にグループ・クラスレベルの学習の際には積極的に取り組んでいただきたい。

6 評定の算出方法

① 前期・後期中間試験＝「現代文」としての独自の試験問題による素点。

② 前期末・学年末の評定＝「古典」と合算後「国語I」の10点法による評定を提出。

《資料2-5-2・「研究の手引き」の実例・その2》

高1 国語Ⅰ・現代文 研究の手引き No. 1-2: 2002年4月11日

高1A組()番【 】

◆ 本日の研究テーマ(2) = 短編小説を味わうー芥川龍之介「ピアノ」を読む

1 まず初めに中学の国語と高校の国語との相違について簡単に言及する。本校の「国語Ⅰ」の授業は、5単位を「現代文」2単位、「古典」3単位に分けて、別個の担当者が扱うという形態になる。そこで使用教科書の目次を見ると、「現代文編」「古文編」「漢文編」の3部構成になっている。これを本校の形態に当てはめると「古文」と「漢文」を「古典」としてまとめれば、『現代文編』をこの授業で、そして「古文編」と「漢文編」を小西先生の「古典」の授業でそれぞれ扱うということになる。このように、高校の国語は中学と比較するとより専門化された内容を学習することになる。

2 では「古典」と「現代文」とは、どこでどのように区別するのだろうか。高校生の教養として、ぜひ覚えておきたいところである。

3 本年度の「現代文」は、主として「読むこと」を扱う。それと同時に「話すこと・聞くこと」や「書くこと」も十分に取り上げたい。さらに漢字や語彙(ごい)の学習も自主的に進めてほしいと思う。そこで「読むこと」の内容だが、前期は主に文学的文章(小説)、後期は主に論理的文章(論説)と韻文を読むことにしたい。なお、この学年は「朝の読書」を励行している。生徒諸君の読書生活の充実にも資する授業を展開したいものである。

4 本年度高校1年生の前期の主な教材は、どのクラスも芥川龍之介の短編小説となる。教科書の「羅生門」と、それに関連した「藪の中」という小説を取り上げる予定である。そこで本日は、読みのウォーミングアップとして、芥川龍之介の「ピアノ」という短編小説を紹介しよう。短いので直ぐに読めるだろう。あえて『芥川龍之介全集』からそのままコピーした資料を用意した。芥川が書いたままの歴史的仮名遣いである。「原文」の味わいを伝えたいという配慮から、発表当時のままの表記とした。もちろん教科書ではすべて現代仮名遣いになっている。

5 難読語が多く、さらに歴史的仮名遣いが用いられているので、まず朗読してみたい。次の3つの点に十分に注意しながら読んでみよう。

① 人物 どのような人物が登場しているか。その特徴、および心情の推移を読み取ろう。

② 事件 どのような出来事が起きているか。因果関係に注意して読み取ろう。

③ 背景 その出来事は、いつ(時代、季節、時間帯)、どこで(場所)起きているか。

6 さらに、表現に関しても常に敏感に読んでみよう。この小説は次のような方法によって書かれている。

主人公=わたし(一人称) = 語り手→主人公の視点からストーリーが展開する

その他、表現上の特色をいろいろと挙げてほしい。

7 授業は、「個人レベル」から「クラスレベル」へと展開する。クラスレベルの学習は、主に発表によって展開する。どうか積極的に発表していただきたい。

◆ 次回の予定 = 教科書の「羅生門」の学習に入る。

◆ 課題

① 今回の授業の復習 = 「研究の手引き」をよく読んでおくこと。

② 演習用課題 = 漢字・読書→参考書を配布する。具体的な学習方法は別途指示する。

③ 次回の授業の予習 = 教科書の「羅生門」を必ず一読しておくこと。

《資料2-5-3・「授業レポート」の実例》

高1 国語I・現代文 授業レポート No. 1 : 2002年4月11日

高1A組 () 番【]

1 芥川龍之介「ピアノ」の人物について。

〈個人レベル〉

〈クラスレベル〉

2 事件について。

3 背景について。

4 表現上の特徴について。

5 「ピアノ」の読後感を含めた授業の総括。

◆評価 ①本年度「国語I」の授業の趣旨と進め方について理解できたか。()

②授業展開に即して「ピアノ」を鑑賞することができたか。()

◆本日のひとことメモ (自由にコメントを記入すること)

担当者印_____

注

- ¹ たとえば『教師大村はま96歳の仕事』（小学館、2003. 6）に収録された講演記録「教材をつくる、授業をつくる」において大村は、話し合いの「てびき」について、「子どもに勉強をさせるときには、それなりに手を引いてやらなければだめです。これは、話し合いを始めるときの手の引き方です。」と述べている。
- ² 大村は「てびき」という表記を用いたが、わたくしは漢字を用いて「手引き」という表記で統一した。
- ³ 『大村はま国語教室・第十二巻』（筑摩書房、1984. 1）は「国語学習記録の指導」として、「学習記録」に関する大村の実践が収録されている。